

博物館だより



はん しょう すこ ろく
高岡繁昌双六(部分)

明治33年(1900) 1月発行 北陸中央新聞社附録
縦62.0 横78.0cm 当館蔵

高岡の老舗100年—「高岡繁昌双六」から—

高岡の町は、江戸時代の初めに加賀2代藩主前田利長(1562~1614)によって越中射水郡関野(高岡の旧地名)の台地に開かれた。その際、利長は鋳物師をはじめとした職人や商人を高岡に招き、特権を与え、生活必需品の生産に着手させるなど、町政に力を尽くした。しかし、高岡入城後わずか5年でこの世を去り(慶長19年・1614)、さらにその翌年、徳川幕府による「一国一城令」が下され、町人や武士達は離散し、高岡は急速にさびれていった。しかし、3代藩主利常は、城下の町民の流出を防ぐため、産業奨励のための種々の保護と特権を与え、異母兄である利長の遺志を継ぎ、高岡を「城下町から商業の町へ」と転換を計った。この政策と商業活動が今日の高岡発展の礎となった。

明治維新を経て、明治16年(1883)に富山県が石川県から分県独立すると、富山が県治世の中心であるのに対し、高岡は商都をめざして進み始めた。なかでも明治17年に設立認可が得られた高岡米商會所は、18年1月から通町で営業を始め、同年12月には御馬出町に完成した六角形の洋館2階建ての新社屋に移転して営業を始め、米相場の活況を蘇らせたことが特筆される。また、市制施行の明治22年には、高岡米相場の市況を伝えた「高岡商況」(夕刊)が発刊され、取引情報を知らせる唯一の業界紙となった。一方、交通面では、明治31年の中越鉄道の開通、翌年の高岡—富山間の北陸線の開通(高岡駅は31年に開業)と伏木港の開港指定により、陸上並びに海上輸送の発展につながった。その後、2度の大火(明治21年・33年)により高岡の町は大損害を受けたが、中心部は燃えない現在も残る土蔵造りの町として復興し、商都高岡へと再生した。



「高岡繁昌双六」は、北陸中央新聞社が明治33年(1900)正月の付録として発行したものである。名所・施設・商店・人物などが挿絵を交え紹介されており、当時の高岡の賑わいがかがえる貴重な歴史民俗資料である。そして、発行から半年後の明治33年6月、高岡は大火に遭い、3,589戸を焼失したというが、その災禍から免れ100有余年経た今日まで伝えられてきた。平成元年(1989)に高岡伝統産業青年会の協力で復刻された。ちょうどこの年は高岡市制100年の節目の年で、高岡市にとって良い記念となった。この双六は唯一、市内の塩崎家の所蔵品が確認されていたが、平成14年に東京在住で高岡出身の園本氏のご好意により、貴重な2枚目となるこの双六の原資料が当館に寄贈された。古陵筆によるリアルでユーモアも感じられる挿絵を添え、当時の風俗を描いている。発行元

である北陸中央新聞社をふり出しに、「いろは…」47文字によって「上がり」の高岡駅まで56景で構成されている。主な場面をあげてみると次のようである。

- 1. 公共施設—射水郡役所・高岡駅・高岡警察署・郵便局など
2. 学校—育英小学校・工芸学校・商業学校・第二中学校(後の高岡中学校、現高岡高校)など
3. 観光名所—古城公園・桜馬場・大仏・瑞龍寺など
4. 祭礼—曳山・七夕など
5. 金融機関—共立銀行・富山十二銀行・貯金銀行など
6. 料亭・劇場—木津楼・古曼楼・板橋座など
7. その他—鋳物工場・高岡漆器・魚市場など。

また、篠井市長をはじめとする著名人・経済人など幅広く高岡市勢を紹介している。

この中に永年の風雪に耐え、伝えられた商家の暖簾を今も守り続けている老舗が描かれている。その幾つかを取引所等の商業施設を交え、当時の説明表現により以下に記してみる。〔()内は現在地〕

「い」高岡物産・高岡の特産。年々三十万円内外輸出す。販売は塩崎利平氏名あり。(木舟町の塩崎商街)

「ろ」井上兄弟商店・業種完業の販売最も広く県下医家の大部分は其得意なり。(笹川の井上誠昌堂)

「は」魚市場・川原町に三個所あり。毎朝の繁昌図の如し。

「よ」漆器・高岡の特産にして輸出販路大にひろし。

「つ」米穀取引所仲買(菅池・大坪・志摩)・三店は最も名あり ㊦の如き毎日三百本の電信を取扱うという。以て其隆昌を知る。

「な」木谷酒店・木谷氏は任侠を以て名あり。其の酒の販売高又県下有数の多額なり新年二日の(初)売りは市の偉観の一に数えらる。(御旅屋町の木屋)

「み」和田屋酒店・各国銘酒を販売して信用あり金貨葡萄酒の大販売店なり。(通町の和田屋酒店)

「の」北一合資会社・綿花、綿糸、麻苧、蚊帳等取引極めて広く北一の名今や全国に響く。支店は金沢市にあり。(丸の内の北一株式会社)

「え」呉服・地方の産出に係かるものと他国品と共、市内呉服を商うもの他に比して頗ふり(ふる)多く資産家亦多し。就中、東北合資・呉服合資・里村・志甫・金田・梅田等其の重も(主)なるものなり。

「し」鋳物・鋳物は金屋町の特色にして金沢公園日本武尊銅像は其鋳出する所なり。

「え」米穀外四品取引所・北陸全道中三取引所の一にして取引の隆盛なる。日々数万石に上ばる。

これらの表現からは、当時のエネルギーな市民の姿がうかがうつとされる。

大正期から昭和10年代の戦前・戦中の激動の時代に、高岡の商人達は、近郊への店舗移転や国による産業統制の時代を経て戦後新たな出発をし、今日まで躍進してきた。江戸期から明治の初めに創業し、現在まで操業を続け、明日に向かい日々邁進し続ける老舗店の益々の発展を願う次第である。

※ 参考文献 「タイムスリップ 明治から平成へ」—塩崎家史料研究 駒沢義則— (平成元年)

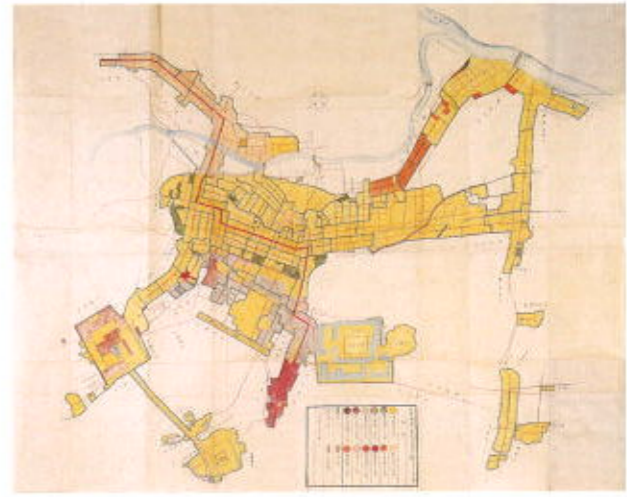
越中国射水郡高岡町全図

明治8年(1875)、紙本墨画淡彩 縦109.6cm × 横117.9cm、平成元年収蔵

江戸時代の絵図に明治初期の町割りが加筆されている絵図です。高岡町域は黄色で、周辺の村から「受地」(借地)している所は色分けして分かりやすく描かれています。

高岡の町中を大小のクランクを繰り返しながら通る北陸道は、赤で強く引かれており、加賀藩内の物流の拠点であった高岡の繁栄を偲ばせています。高岡開祖・前田利長を祀る瑞龍寺(国宝)と利長墓所を結ぶ参道(八丁道)も高岡町であったことがわかります。

約7万2千坪の高岡城址と約3万6千坪の瑞龍寺が、ほぼ同じ大きさで描かれており、概括的・観念的な絵図となっていますが、位置関係は正確に把握されており、当時の高岡がうかがい知ることが出来る貴重な資料といえます。



◆新収蔵資料紹介(平成16年1月31日現在)

Table with columns: 購入 (Purchase), 数量 (Quantity), 分類 (Classification), 寄贈者 (Donor). Lists various items like books, maps, and historical documents.

Table with columns: 数量 (Quantity), 分類 (Classification), 寄贈者 (Donor). Lists various items like historical documents, maps, and books.

郷土の歴史資料などの情報を求めています。歴史資料や生活資料は、社会の変遷や興亡の足跡を理解する上での貴重な文化遺産です。当博物館では、古文書・生活資料などの収集保存を行い展示に生かしたいと考えております。情報がございましたら、是非ご提供をお願いいたします。

◆常設展「郷土の暮らしと文化」

4月1日(木)～平成17年3月31日(木)

高岡市は、江戸初期の開町以来、銅器・漆器をはじめとする伝統産業を生み出し、今日まで工商都市として発展してきました。特に明治期における高岡商家の商業活動は、全国的にみても特筆すべきものがあり、幾多の逸材を輩出してきました。

このような郷土の特性について、当館収蔵資料を中心に高岡の歴史・民俗・産業や郷土の偉人達を紹介し、市民学習の場として公開します。

◆企画展「高岡の老舗」

4月24日(土)～6月13日(日)

高岡は、江戸初期に前田利長による城下の町づくりが行われました。その際に当地へ招かれた鋳物師や指物師などの職人や商人は、加賀藩の保護により廃城後も高岡に留まりました。そして江戸時代を通して、藩内の美術工芸・経済流通の主要都市として成長していきました。

さらに、明治・大正・昭和を経て現在に至るまで、加賀文化の影響のもと発展を続け、今日の商都高岡を築きました。

本展では、創業以来100年前後の永きを経て、高岡の老舗というにふさわしい歴史ある商家に伝わる営業資料を展示し、商都高岡の伝統と時代の変遷を紹介します。

鋳物・漆・葉種・呉服・酒・菓子屋・茶舗などの老舗に残る看板・鑑札・菓子木型・法被・古文書・写真などを展示。



堀崎商衡 法被

	<p>—— 開館時間 —— 午前9時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)</p>
	<p>—— 休館日 —— ・月曜日 (国民の祝日にあたるときは その翌日) ・年末年始 (12/29～1/3)</p>
	<p>—— 交 通 —— JR北陸本線高岡駅より徒歩10分</p>
	<p>—— 入館無料 ——</p>
	<p>—— 入館無料 ——</p>

◆企画展「高岡城」

7月22日(木)～8月29日(日)

高岡古城公園は自然美豊かな水濠公園として知られ、市民の憩いの場となっています。その起源は慶長14年(1609)、加賀藩2代藩主・前田利長により「関野」に築城された高岡城に始まります。そして同19年(1614)の利長の死去、翌年の一国一城令による廃城の後も「古御城」として保持されてきました。

明治初期の民間払い下げの危機も服部嘉十郎ら有志の努力により明治8年(1875)公園として指定されることにより切り抜けます。

その後も図書館・市民会館・美術館(現博物館)などが建設され、今日まで400年近くの命脈を保ち続けてきました。

本展では、古城公園が近世初頭の築城以来、古城址として残り、明治期の指定を経て公園として生まれ変わる物語を高岡古城図・古文書・公園指定請願書・各種公園絵図ほか、利長ゆかりの資料により紹介します。



高岡古城図(部分)文政13年
(金沢市立玉川図書館蔵)

◆特別展「生誕150年記念 高峰譲吉展」

10月6日(水)～11月28日(日)

高峰譲吉(1854～1922)は後の加賀藩典医の長男として高岡に生まれました。少年期より長崎・東京などで勉学し、後年タカチアスターゼの発明やアドレナリンの発見により医学界・薬学界における偉業を成し遂げ、化学者として世界的に知られました。また、富山県の黒部水系の豊富な電力に注目し、郷土高岡を一大アルミ産業地帯にする提言をしました。一方で、明治・大正期にアメリカで日米の人的交流・文化交流にも尽力し、「無冠の大使」と称されました。

本展は、高峰譲吉生誕150年を記念して、高峰譲吉博士顕彰会(高岡・金沢)や三共株式会社が所蔵する書簡・遺愛品・譲吉肖像写真・古文書・資料写真などを展示します。



研究室の譲吉像
昭和24年 樽谷清太郎作

◆収藏品展「くらしの民具」

平成17年1月15日(土)～3月21日(月)

明治・大正・昭和に至る人々の暮らしの移り変わりを当館収蔵の衣食住に関する資料を中心に、新収蔵資料も併せて展示し、郷土の暮らしを考える機会といたします。